漆黒のスナイパー

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒のスナイパー

【Ｎコード】
Ｎ７８２４Ｃ

【作者名】
菜花

【あらすじ】
キッドの予告状が届いたという美術館。その謎を解き、コナンが帰ろうと美術館を出た後、コナンは怪しい人物を目撃する。コナンは尾行したものの……キッドＶＳコナンＶＳ漆黒のスナイパー！！

前編

双宝町（そうほうちょう）に新しくできた『ジュエリー美術館』。その目玉展示品である時価数十億円のダイヤ『シリウスの涙』を奪うとの予告状が怪盗キッドから届いた。

８月１４日
予告状が届いたという情報をきき小五郎一行は美術館へと向かった。
「中森警部！」
小五郎が叫んだかと思うと二人は強めの握手をしあった。そんな二人を他所にコナンは近くにいる警察にキッドの内容をきいた。
「ねぇ刑事さんキッドの予告状ってどんなやつだったの？」

「ああ、これだよ」
刑事から一枚の紙がわたされた。コナンの顔は見る見るうちに微笑みへと変わった。

『望月の猪の中間。シリウスの涙を頂きに参上する　怪盗キッド』

（明日の午後１０時に現れるのか…）
何時もの得意気な顔を見せながらコナンは暗号の解読に参加した小五郎と中森警部にヒントをだした。
「ねぇおじさん？　お月さんに願い事したら望み叶えてくれるの？」

「はぁ？　んなわけねぇだろ！」
小五郎が怪訝な顔でどなた。

「でも『望みの月』ってかいてあるよ？」
コナンは子供スマイルを発揮させ質問した。その質問に答えたのは蘭だった。
「其はね『もちづき』っていって満月のことよ」
「へーじゃぁ猪の中間って１０時だね！」
「はぁ？　お前さっきらなにいってんだよ！」
小五郎はコナンが言っている意味がさっぱりなようで、よりいっそう怪訝な顔をした。そんな顔を見てコナンは心の中でため息をついた。
「だから、月と猪と時間何か思いつかない？　猪は猪でも干支だと思うよ！」
コナンは小五郎に微笑みながら目をむけた。しかし、それでも分からないと言う顔をした後コナンが次のヒントを出しそうとしたら中森警部が叫んだ。
「わかった！キッドは明日午後１０時にここにくるぞ！」小五郎は分からないと言う顔をみせていたのでコナンはしょうがなく教えた。
「おじさん、猪は干支の亥『い』を指すんだよ！だから亥の刻の真ん中は１０時だよ」
蘭と小五郎が成る程と言う顔を見せた。そして、小五郎と中森警部は今日から張り込みをするといい蘭とコナンは帰れと言われてた。

～夕方・美術館の外～
「でもコナン凄いね。キッドの予告状解いちゃうんだもの」
「たまたまだよ！僕この前、蘭姉ちゃんの古典の資料集みたんだ。ごめんなさい」
コナンは咄嗟に思いついた嘘の言葉を謝りながら打ち明けた。

「もー勝手に人の見ちゃだめよ！でもそのおかげ解けたことだから許してあげる」
コナンは、ほっとした。またボロがでて怪しまれたかと思ったからだ。歩きながら道路をみると美術館から怪しげな男がバイクに乗って去っていった。今はまだ客など入れない筈の美術館だったのでコナンは不振に思い後をつける事にした。
「あ、蘭姉ちゃん僕、用事思い出したから先に帰ってて！」
その言葉を残してスケボーて怪しい人物を追った。
「もう！！何なのよ」
蘭は一人米花町行きのバスにのった。

一方コナンは夕方の道路を颯爽と走っていた。
（アイツ美術館で何やってたんだ？）
コナンは見失わないように後を付けながら考えた。そして、一つの廃ビルにバイクを止め中へ入っていった。もう辺りは薄暗くなろうとしていた。そんな事お構い無しにコナンは少し時間を置いてから廃ビルへと足を進めた。そして屋上へと走った。息も絶え絶えに周りを見渡すと真ん中に何かを建てるはずだったのか大きな四角い穴があいていた。誰も居ないか確認した後、手すりの方へと歩み下を見た瞬間、頭に衝撃が走った。振り向くと、さっきバイクに乗っていた男が鈍器を持って立っていた。
「さっきから尾行してたのが、ガキだとはな」

そう吐き捨てふらつくコナンを四角い穴へと突き落とされた。
「わぁっ」

「登れるとこなどないよ？まぁユックリ眠りにつくといい。『死』と言う眠りにな！」
男は笑いながら去って行った。数分後には辺りは真っ暗な空へと変

わっていた。身動きのとれないコナンはそのまま仰向けになり薄れゆく意識の考えた。
「あ、あいつ何者…なんだ…」
しかし、コナンは真上にある夜空を茫然とみながら気絶した。
床には頭から出た血で赤く染められて行った。

〜〜〜〜

目が覚めたとき、誰かの顔がうっすらと見えた。しかし、周りに明かりがなく顔を確かめる事は出来なかった。
「よぉ！目が覚めたか？あんなところで、寝てたら風邪ひくぜ？」

「え？怪盗キッドどうしてお前が！？」
コナンはキッドに抱き抱えられて居たのだ。それに今はハンググライダーで大空を飛んでいた。
「彼処は俺の通り道なんだ。まぁお前が彼処に血ぃ流して倒れていたのはびっくりだけど」
カラカウような口調でコナンを見た。
「そ、それより何処に行くつもりだ。今すぐどっかの屋上で下ろせ！！」
キッドに助けられたと気付き暴れるコナンにキッドはジト目で話し掛けた。
「病院。お前な、よくその体でそんな事言えるな。少しは自覚しろよ。お前の傷、結構重いぞ？下手したら死んでたぞ？まじて」

「良いから下ろせ！」
反対するコナンを呆れた顔でコナンの腕にある麻酔針をコナンの首に撃った。
「うぅ。何を…」

「暴れるからだ！もっと寝てろ」
コナンは麻酔針によって深い眠りに落ちていった。

前編（後書き）

この作品迷いましたが投稿する事に決めました。
ご存知の方も居られると思いますが、去年大阪で上映された話しです。
この話し忘れたくないと思い、アレンジを入れて前編を完成させました。
興味のある方、後半もどうか宜しくお願いしますm（＿＿）m

後編

～8月15日・朝～

「コナン君…目を覚まして…」
蘭の願いが叶うかのようにコナンが目を覚ました。
「うっ…。」

「コナン君！コナン君！！」
コナンの呻き声を聞き少し大きな声で呼び掛けた。
「蘭…姉ちゃん？　痛っ…」
コナンは起き上がろうとしたが頭に痛みを感じた。
「ダメよ。まだ動いちゃ！頭怪我してるんだから！私先生呼んでくるから待ってるのよ！」
蘭は走って病室を飛び出した。
（俺…一体なんでここにいるんだ？）

～～～～～

「うん。もう大丈夫でしょう。　では、お大事に」

「ありがとうございます」
蘭の挨拶で医者はニコっと笑って出ていった。
「蘭姉ちゃん？　どうして僕、病院に居るの？」
コナン怪訝な顔で蘭を見た。蘭はキョトンとした顔で答えた。

「覚えてないの？　昨日病院から電話があって来てみたら、コナン君が玄関の壁の前に寝かされてたのよ？　それに頭怪我してたから直ぐ看護師をよんで見てもらったのよ？」

「そう…だったの。」
「でも変よね。病院から電話かけるなら、怪我の治療してくれてたらいいのに」
（ハハハ…キッドだな。あの後、俺を病院前に於いて蘭に電話をかけて立ち去ったのか）
コナンは思い出したように、心の中で呟いた。
「ね？それより、どうして頭怪我したの？　あの後何をしてたの？」
少し考えてた後、蘭に説明した。
「あの後ね、僕の好きなサッカー選手がいて、追いかけてたら、滑って転んじゃったんだアハハ…」
コナンの言葉に少し不振になりジト目で見た。
「本当に？」
「うん。本当だよ！」
「そう。明日、精密検査あるから絶対安静にね。じゃぁ、今からお父さんのところ行ってくるから、どこにも行かないでね！」
「わかってるよ！」
蘭は最後の言葉を強調させてコナンをじっと見ながらドアまで歩いた。
コナンは子供スマイルで蘭を見送った。蘭が出ていくと一気に顔つきが変わった。
（あの人なんであんなところにいたんだ？　あの場所はキッドが通る道。まさか！！）
コナンはキッドに危険があると確信した。

コナンは迷い無く病院を飛び出した。
（キッドの来る時間をあの美術館で探ってたのか…そして、聞いちまったんだ。俺らの話しを！今は昼の1時か…あのビル、病院からちっと遠いな。）
コナンは早歩きで向かった。
スケボーがないため、歩く手段しかなかった。

「う…」
走っていた速度が落ちる。壁に手を付け、逆の手で頭を抑える。少しづつ頭痛かおさまり、早歩きでビルに向かった。何度も止まり同じ行動を起こした。頭の頭痛は悪くなる一方だった。
「こんな怪我に負けちゃいけねぇんだ…確りしろ！」
誰に言うでもなく自分に言い聞かせる。美術館に着いたのが5時前だった。ビルに行くには、まだまだ遠いものだった。
それでも必死に走った。ビルに着いたのはあれから2時間経っていた。
コナンは１０時まで、ビルで待った。

～9時３０分美術館～
中森警部が部下と警備員に命令をだした。
「Ａ班は正面玄関！Ｂ班は裏！俺と毛利さん、Ｃは此処だ。警備員は宝石を守ってくれ！あと、マスクは絶対着けておけ！キッドは睡眠ガスを使う行為が多いからな！」
部下立達はテキパキと配置についた。そして時間は着々と過ぎて行

った。

〜１０時〜
突然美術館が煙に包まれた。
「残念ながら、私以外のマスクは偽物です。」
警備員の姿の男が警部に答えた。
「おまえ！キッドか！」
その時、美術館全ての電気が消えた。その後わいわい言うなかキッドは美術館から消えた。

〜一方ビル〜
「もうすぐだな。キッド。絶対仕留めてやるよ」
黒い影は真っ暗な空にライフルを構えた。

（そうは、いくかよ）

その少し離れたところでキック力増強シューズのダイヤルを回してサッカーを蹴ろうとした。しかし、頭痛と目眩で狙いがズレ、男の隣をボールが素通りした。それに気付いた、コナンに向かって銃を放った。その弾をふらつきながらも避けた。しかし、弾はつぎから次へとコナンの方へと向かって来た。一発は頬に当たっているが必死で逃げた。

その時、トランプが空から一枚地面に刺さり煙幕が出て来た。その一瞬の隙にコナンを抱き抱え空へと逃げた。
「くそ！どこ行った？　ガキ！出てこい！」
男は完全にぶちぎれていた。

「ほら、今のうちに麻酔針を！」
キッドに言われるがままに狙いを定めて男の額へと針が刺さった。
「よし！」
キッドの言葉と共に、地上へとコナンは下ろされた。
「…サンキューな」
コナンはぼそりとお礼をいった。
「いいって。お前いなけりゃ俺は殺されてるとこだよそれに免じてこれ返すよ」
キッドがコナンへと軽く宝石を投げた。
「今日は捕まえねぇから早く、立ち去れ。もうすぐ来るんだろ？警部たち」

「ああ、じゃぁ後の事はまかせたよ。探偵クン」
キッドが立ち去ってから数分後、中森警部と小五郎、蘭が屋上へと上がってきた。
「コ、コナン君なんでここに？」

「え、ちょっとね。それより…この人、キッドを殺そうと…してたよ…」
疲れきった体で必死に中森警部に男の事を話した。
「何！！キッドを！」
中森達は一斉に男の方を向いた。部下が手早く手に手錠をかけた。
「うん…これライフルと拳銃だよ…」
男の側にライフルと拳銃が落ちていた。
「それより、コナン君怪我してるじゃない！！」

「だ、大丈夫…」
コナンはそのまま、ふらつきながら倒れた。
「コナン君！？　確りして？コナン君！」

「救急車だ！」
中森警部の指示で部下が携帯を取り出した。救急車で運ばれ自分の病室へと戻ったコナン。
蘭はずっとコナンの手を握り続けた。

〜二時間後〜
「う…」
コナンの呻き声で蘭は握っていた手をよりいっそう強く握った。
「ここ…どこ？」

「病院よ」
蘭はコナンが目覚めた事によりホッとした顔で答えた。
「もぅ大変だったんだからね！　『美術館から少し離れたビルにライフルもった男がいます』って通報あって行ってる途中銃の音はするし、来てたら男は倒れてるし、居ないはずのコナン君は居るしで、その上コナン君気を失って倒れるしね」

「ごめんなさい。それより宝石は？
僕渡す前に気を失っちゃって」

「大丈夫！ちゃんとコナン君のポケットの中で大事そうに布でくるまれた宝石中森警部が気付いて回収したから！」

「そっか。良かった」

「今日はもう寝なさい。私ずっと此処にいるから！」

「う、うん」コナンは蘭に気付かれない程度に顔を引きずった。

1週間後
「良かった。コナン君の怪我治って。」
「うん」
蘭は笑顔でコナンを見て、またコナンも蘭を見上げた。

～～END～～

後編（後書き）

無事に終わりましたm（＿＿）m
皆様最後まで付き合ってくださってありがとうございます。

如何だったでしょうか？たった二話で固唾けてしまいました。
もし良かったのなら嬉しい限りです（≧∇≦）！！
でも、あまり宜しくなかったら謝ります。
「ごめんなさい」

では、短いながら終わらせて頂きます。
評価感想お願いします

～～２００７・１０／８～～
菜花

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7824c/

漆黒のスナイパー

2010年10月11日01時25分発行